クズのようになりたい？なりたくない？

動物応用科学科4年　奥津憲人

私は卒業研究として東京都の日の出町にあるゴミ処分場跡地で調査をしている。ここには広い草原があり、いろいろな植物が生育している。私は昨年の秋から毎月ここを訪れているので、処分場の季節の移り変わりを見ることができた。毎年一回行われる下草刈り後の静かな草原。冬の寒い中でも必死に成長し、春から夏にかけて日の光をいっぱいに浴びて、徐々に大きく伸びている草花たち。秋には綺麗なススキの穂も見られる。毎月同じころに行き、そのたびに少しずつ変わっている草原を見るのは、調査の楽しみの一つとなっていた。

その中で一際目を惹く植物があった。それはクズというマメ科の多年生蔓植物だ。「くずきり」という食べ物があるが、これはクズの根っこから作った葛粉（くずこ）を用いて作った食べ物である。クズの根からとったでんぷんを得るのは非常に手間がかかるため本物の葛粉から作った「くずきり」は最高級で、ふつうはジャガイモの澱粉を用いるようだ。そんなクズは現在日の出処分場跡に広く分布しているが、実は問題にもなっている。というのもクズの生命力は非常に強く、いくら下草刈りをしてもまたすぐに生えてくるのだ。その繁殖力は恐ろしいほどで、どんどんと広がって地面を覆いつくしてしまう。クズは地下茎で繋がっているようで、その根を掘らなければいくらでも伸びていくのだ。

4月頃だっただろうか、私が調査に行くと草原の一部が帯状に刈り取られていた。どうやら車が入るための道を作るようで、しばらくすると砂利を敷き詰めた道路ができていた。クズやオオブタクサが繁茂する草原に不自然に生まれた道路は、人間の身勝手さを象徴しているように思えた。

夏になってそこに来てみると、恐ろしい光景が広がっていた。道の両脇にあったクズから、何本もの蔓が足を延ばしていたのだ。人間の侵略に負けず、少しでも自らの分布を広げようと空いている場所に蔓を伸ばそうとする姿は、生きるために必死になっているように思えた。鉈や剪定ばさみを使えばすぐに切れてしまう弱い存在だが、強く根を張って土台を作り、少しでも隙を見つけては自らを伸ばしていくそのうちすべての地面がクズに覆われてしまうのではないかと思うほどで、その生命力は私を震撼させた。

一方でクズはとても人間的だなと感じた部分もある。クズはススキなどの背の高い植物を利用して自らをより高い場所へ拡大しようとするが、それは林の中でも例外ではない。他のものを押しのけてでも自らを大きくしていく様。少し切られたり押しのけられたりしてもすぐにその場に戻ってくるその強さ。やがては巨大な樹木ですら覆いつくしてしまう強大さは、どこか人間に通じるものがあるのではないだろうか。

11月、気温はだいぶ下がり、山の木々が紅葉を始める季節。調査に行った私の目に映ったのは、砂利道に足を伸ばそうとしたが根を張ることができずに枯れてしまったクズの姿だった。どんなに強い力を持っていても届かないことはある。自らの力を過信し、他の物を蹴落としてまで自らを大きくしようとすると、いつ

かは自らを苦しめることになる。私は枯れていくクズを見てそう感じた。

秋の草原にはクズの隙間から伸びたススキの穂が一面に広がっていた。どんなにクズに追い詰められても、自らの芯を持って最後には立派な穂を立てるススキが、私にはとても美しく見えた。私はクズよりもススキのように生きたい、そう思った。